

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷五第

行發日一月九年六正大

論說

同盟罷工下和解及仲裁制度(一)……………法學士 河田 嗣郎
 所得稅ニ於ケル所得ノ意義(一)……………法學博士 神戸 正雄
 露西亞主義……………法學博士 米田庄太郎
 飛脚ノ變遷(二、完)……………法學士 本庄榮治郎

時事問題

戰後ニ於ケル軍國主義ト民主々義……………法學博士 戸田 海市

雜錄

あだむ・すみす傳拾遺……………法學博士 河上 肇
 獨逸ノ植民的發展ノ起源……………山本美越乃
 露國ノ定期刊行物ニ就テ(一)……………文學士 高倉 輝
 ゆこ・すうらう民族運動(二、完)……………文學士 米田庄太郎
 經濟漫錄(三)……………瀧本誠一
 しゅもーらゝノ戰後ノ獨逸觀……………法學士 櫛田 民藏
 米國ニ於ケル婦人ノ職業……………法學博士 河上 肇
 臺灣ニ於ケル死亡率及疾病統計……………文學博士 内田 銀藏

獨逸ノ植民的發展ノ起源

山本美越 乃

平時ニ於テスラ比較的良書ニ乏シキ植民間題ニ關スル參考書ハ、歐洲戰亂ノ爲メニ一層之ヲ得ルコト困難トナレリ、然ルニ今年ニ入りテヨリ、英・獨兩國ノ過去ニ於ケル植民的發展ノ大勢ヲ極メテ簡潔ニ然カモ其ノ要ヲ逸スルコトナキ様記述シタル點ニ於テハ、確カニ出色ノモノトモ稱ス可キ二種ノ書物ノ吾人ノ手ニ入レルモノアリ、其ノ一ハ伊太利ノ著名ノ政論家 Paolo Giordani 著(一九一五年八月出版) Mrs. G. W. Hamilton 譯 "The German Colonial Empire, Its Beginning and Ending" (一九一六年九月倫敦ニ於テ出版) ニシテ、他ハシカゴニ一大學講師 C. H. Currey 著 "British Colonial Policy, 1783-1915" (一九一六年おくすふなールニ於テ出版) ナリ、前者ハ一五六頁(後者ハ極メテ小形ニシテ二六六頁)ノ小冊子ニ過ギズト雖ドモ、其ノ内容ハ散漫ニシテ徒ラニ膨大ナル從來ノ類書ニ優ルコト數等ナリトス、若シ英・獨兩國ノ植民的發展ノ事蹟ヲ細ヨリ微ニ入リテ攷究セントスルニ非ザル限リハ、是等ノ兩書ハ最モ手頃ニシテ何人ニ對シテモ推薦シ得ベキモノナリト信ズ、吾人ハ我が國民間ニモ過去ニ於ケル各國ノ植民の活動ニ關スル智識ヲ普及セシムルノ必要アルコトヲ感ズル者ナルガ故ニ、機會アラバ是等兩書ノ内容ヲ紹介セント考フルモ、茲ニハ讀過ノ際寡聞ヲ補ヒ少ナ

カラザル興味ヲ感ジタル、『獨逸ノ植民的發展ノ起源』ナル
Giordaniノ著書ノ一節ヲ紹介スルコトトナセリ。

獨逸ノ植民的發展ノ起源ハ疑モナク之ヲハ
No同盟 (Heuseトハ古獨語ニテハ組合又ハ聯合
ノ意義ヲ有ス)ニ求ムルコトヲ得ベシ、はんざ
同盟ハ第十三世紀ノ頃はんぶるぐ及びゆーべつ
クノ二市ガ、當時ばるちつく沿岸ニ出沒シタル
海賊ニ對シテ彼等ノ商業ヲ保護シ、且其ノ有セ
ル諸種ノ特權ヲ保全スル目的ヲ以テ締結シタル
條約ニ由リテ、初メテ組織セラレタルモノニシ
テ、是等兩市ノ該同盟ニ依リテ受ケタル利益ハ
頗ル顯著ナルモノアリシヨリ、久シカラズシテ
ぶれーめん・のぶでろつど・ろんどん・ころーん・
ぶるんすういっく・だんぢひ・どうんきるく・あん
どわーぶ・おすてんど・ろつたーだむ・あむすた
ーだむ等ノ諸市ヲ初メトシテ、北歐諸國ニ於ケ
ル八十ノ都市之ニ加盟スルニ至レリ。

該同盟ノ組織ハ歐洲ノ中世史上ニ於ケル最モ
奇異ナル現象ノ一ト稱スルヲ得ベシ、何トナレ
バ該同盟ハ異ナリタル國家ニ屬セル人民及都市

ガ、或共同ノ利益ノ爲メニ一ノ同盟ヲ形造レル
ニ過ギザルガ故ニ、之ヲ打テ一丸トナシ新タニ
一ノ國家又ハ國民ヲ組織スルコトハ不可能ナリ
シト雖ドモ、然カモ同盟自ラハ同盟者ノ所屬國
家ト全ク獨立シタル政府・法律・議會等ヲ有シ、
陸海軍ヲ指揮シ、裁判官・外交官等ヲ設ケ、獨立
國家及君主ト對等ノ地位ニ立チテ協商スルコト
ヲ得ルノ權ヲ有シタルヲ以テナリ。該同盟ハ最
モ勇敢ナル活動ヲ遂ゲタル後一六三〇年ニ至リ
テ解散セシガ、當時ノ同盟ノ記念トシテ現今ト
雖ドモ尙ホ世人ノ記憶ニ存セルモノハ、唯はん
ぶるぐ・ぶれーめん及りゆーべつくノ二市アルノ
ミ。

はんざ同盟ニ加入セル者ノ海外發展ノ事業
ハ、同盟自ラガ北歐諸國ノ通商ノ全權ヲ掌握セ
ントスルニアリシヨリ、ろんどん・こべんはーげ
ん・すどつくぼるむ・ちすこう・にーせに、のぶで
ろつど等ニ重要ナル通商ノ根據ヲ置カンコトニ
其ノ全力ヲ傾注セルニ止マリ、廣ク海外發展ノ
事業ニ着手スルニ至ラザリキ、現ニ同盟都市ノ

一タルリゆべづくニ於テハ、もろつて沿岸ニ通商ノ一中心地ヲ置カント企テシモ成功セズシテ止メリ。

故ニはんご同盟ガ現今ノ所謂植民事業ヲ實際計畫シ、若クバ之ヲ成就セシメントシタリトハ、今日之ヲ斷言スベカラザルモ、少クトモ該同盟ハ獨逸國民ノ植民的精神ノ最初ノ發露タリシコトノミハ之ヲ疑フ可カラズ、而シテ此ノ精神ハ假令實際上ノ效果ヲ奏スルニ至ラザリシトハ云へ、其ノ後南獨地方ノ商人等ニ依リテ固守セラレ、彼等ハはんご同盟ト雖ドモ未ダ企テ及バザリシ事業即チ亞米利加ノ發見ニ依リテ祖國ヲ利セントスルノ計畫ヲ立ツルニ至レリ、然レドモ當時獨逸ハ宗教問題ノ爲メニ國內混亂ノ狀態ニ在リシヲ以テ、斯カル事業ノ極メテ重要ナルコトヲ靜思熟考スルノ閑ヲ有セザリシヨリ、該計畫モ遂ニ齟齬ニ歸シタリト雖ドモ、今其ノ事業ノ一端ヲ記セバ、にゆゑるんべるぐノ豪族をひんげる家 (Ehingers) ハ西班牙王チャールズ五世ニ對シテ貸與金ヲ有セシヲ以テ、其ノ

辨濟ニ代エテ一五二一年^{*}ベねづらノ支配權ヲ得タルモ、久シク之ヲ領スルニ至ラズシテ同國人^{*}うゑるせる家 (Walders) ニ讓與シ、うゑるせる家ハ又屢々遠征隊ヲ組織シテ南米北部ノ探險ニ從事セシガ、適マ西班牙人ノ忌ム所トナリテ植民者ノ多クハ彼等ノ手ニ斃レ、又うるむノ富商ふつげる家 (Fuggers) 及ふかーりん家 (Vohlers) 等モ、南歐諸港及かなりー島ニ商業ノ根據ヲ据エ、更ニ印度及ちりー方面ニ發展セント企テタルモ、終ニ成功スルニ至ラザリシガ如キ是レナリ。

其ノ後一百年^{**}ヲ經テばいゑるんノ銀行家ベツへ (Johann Joachim Becher) ハ、亞米利加及蘭領ぎねあニ國人ヲ移住セシメントスル計畫ヲ立テシガ、該計畫ハ多大ノ贊成ヲ博シ、彼ハ容易ニ和蘭政府ノ同意ヲ得タルノミナラズ又自國君主ノ厚キ保護ヲ受ケ、新タニ西印度會社ナルモノノ實現ヲ見ントスルニ至リタルニ、彼ノ名聲ノ傾カニ發揚シタルコトハ却テ嫉妬ノ念ヨリ其ノ事業ヲ妨害セントスル者ヲ生ゼシメ、爲メニ該計畫モ亦中道ニシテ挫折シベツへるハるんぞん

* Köbner (Kolonialpolitik, S. 49.) ニ據レバ 1528年トアリ記シテ後ノ考證ヲ待ツ、

** 1665年

ニ逃レテ此處ニ客死スルニ至レリ。

當時恰モ大選帝侯ふりーざりつひ、あるへる

む、ぶらんでんぶるぐノ王位ニ登リシガ、獨逸ノ植民事業ノ最初ノ實驗ハ實ニ彼ニ依リテ成ツレタルモノナリト言フモ不可ナシ、彼ハ和蘭ニ

於テ教育ヲ受ケシガ、其ノ修養時代ニ如何ニ和蘭ノ植民事業ノ國民ノ商業的才能及航海の活動

ト相俟テ、國力増進ノ一要件ヲ成セシカラ精察

シ、祖國ニ歸ルヤ常ニ『商業ハ國ヲ富マン之ヲ發達セシムル最モ安全ナル方法ニシテ、通商航

海ハ一國ノ據リテ立ツベキ支柱タリ、何トナレハ是等ハ國民ヲシテ或ハ航海ノ業ニ從事セシメ

或ハ製造事業ヲ起サシムルコトニ依リテ、其ノ生計ヲ豊カナラシムルヲ以テナリ』ト公言シテ

憚ラザリキ。

植民事業ニ對スル彼レノ最初ノ試ミトモ稱ス

ベキハ、三十年戰爭ノ爲メニ其ノ國民ノ殆ンド

半バヲ失ヘル自國ノ人口ヲ増加セシメントスル

目的ヲ以テ採用シタル方法ニシテ、即チ彼ハ全

歐洲ニ告グルニ宗教上ノ迫害ニ因リ難ヲ他國ニ

避ケントスル者ニ對シテハ、自國ヲ開放シテ之ヲ迎フベキ旨ヲ以テセシカバ、數年ナラズシテ

各國ヨリ移住セル者頗ル多ク、爲メニ農工商等

ノ諸業ハ再ビ隆盛ヲ極ムルニ至リタルコト是レナリ。

此ノ如ク短日月間ニ國內ノ繁榮ヲ回復セシラ

以テ、彼ハ今ヤ進ンデ海外發展ノ事業ニ着手セ

ントスルニ當リ、先ヅおーでる河口ニ自國ノ勢力ヲ扶植スルノ必要アルコトヲ認メばんめるん

ノ征服ヲ企テシガ、う急すとふありあノ平和條約ハ彼ヲシテ其ノ目的ヲ達セシムルニ至ラズシ

テ止ミタリト雖ドモ、彼ノ大望ハ之ガ爲メニ毫

モ挫折セラルルコトナク、更ニ歐洲ノ海國民ガ

一六四八年乃至一六五二年間ニ新世界ニ於テ獲

タル領土ノ一部ニ自己モ參加セシムルコトヲ決意

シ、和蘭ノ一水師提督(Arnaut Gijssels)ト商議

シテ東印度會社ノ設立ニ努メタルモ、植民事業

ニ對スル輿論ノ後援未ダ熟セザリシガ爲メニ、

此ノ計畫モ亦水泡ニ歸スルニ至レリ。

然レドモ彼ハ衷心植民事業ノ必要ヲ感ツツ

然レドモ彼ハ衷心植民事業ノ必要ヲ感ツツ

然レドモ彼ハ衷心植民事業ノ必要ヲ感ツツ

然レドモ彼ハ衷心植民事業ノ必要ヲ感ツツ

アリシヨリ、熱心ニ該問題ノ研究ヲ繼續セシガ、當時和蘭ノ一大船主タリシラウレ (Benjamin Raule) ハ彼レノ目的ヲ開キ、其ノ大計畫ニ贊成シテ自己ノ努力及船舶ヲ彼レノ使用ニ供ス可キコトヲ以テセリ、然ルニ此ノ事ヲ耳ニセル和蘭人等ハ直チニ之ニ對シテ反對運動ヲ試ミシカバ、ぎねあ及あんじらニ於ケル第一回ノ植民の計畫ハ遂ニ失敗ニ終リタリト雖ドモ、一六八一年ニ至リかびてん、ぶろんく (Blonck) ハ三人ノ黑人酋長ト條約ヲ結び、ぎねあ灣頭ノ地方 (Axim 及 Cape of Three Points 間ノ地方) ヲ大選帝侯ノ爲メニ割讓セシムルニ至レリ、此ノ如クシテ一六八二年三月十七日ノ告示ニ依リ、ぶらんでんぶるぐ、亞弗利加商業會社 (Brandenburgische Afrikanische Handelsgesellschaft) ナルモノ組織セラレ、國王ハ之ニ對シテ奴隸賣買及諸種ノ特權ヲ賦與シタリ。

翌年陸軍佐官ぐれーベン (Major von der Groeben) ヲ長トシテ第二回ノ遠征ヲ企テ、亞弗利加ノ西岸ニぐろーす、ふりーどりのひすぶるぐノ要

塞ヲ築キ、斯クシテ亞弗利加會社ノ活動ノ範圍ハ益々擴張セラレ、奴隸賣買ハ一大發展ヲ遂グルニ至レルヲ以テ、更ニ一六八五年丁抹王ニ請ヒテ其ノ屬領せんと、とます (St. Thomas) 島ニ通商ノ一根據ヲ設定スルノ許可ヲ得、又他方ニ於テハ土人ノ酋長等ト條約ヲ締結シテ、ほわいと、けーぶノ南方あるぐらん灣 (Bay of Arguin) 地方ヲ收メ、新タニあかだ (Accada) 及けーぶ、おぶ、すりーぼん (Cape of Three Points) ノ要塞ヲ設クルニ至レリ。*

大選帝侯ハ此ノ如クニシテ今ヤ多年ノ大計畫ヲ成就シ得タルヲ以テ、次デ亞細亞ニ使者ヲ送り、蒙古ト交渉シテ印度ヲ通商上ノ目的ノ爲メニ開放セシメント企テシガ、當時ぶらんでんぶるぐ人ノ斯カル敏速ナル成功ヲ嫉視シツツアリシ和蘭人等ハ、一六八七年あかだ及其ノ附近ニ上陸シテ、沿岸防備ノ不完全ナルニ乘ジ之ヲ占領セシカバ、亞細亞遠征ノ計畫ハ遂ニ實現セラルルノ機ナクシテ止ミタリ。

之ヲ失敗ノ端緒トシテ其ノ後亞弗利加會社ノ

* 1686年 ハ大選帝侯ノ植民事業ノ最盛期タリシナリ

領地ハ次第二侵蝕セラレ、加フルニ役員間ニ於ケル不正行爲及植民事業ノ進捗ニ伴フ軍備ノ後援ヲ缺ケルコト等ハ、彼ノ事業ヲシテ再ビ起ツ能ハザルニ至ラシメタリ、一六八八年五月九日彼レノ死スルヤ、其ノ子ふりーどりつひ一世王位ニ登リ、當時亞弗利加會社ハ五十萬たゝれる(約二百五十拾萬法)以上ノ負債ヲ有シテ悲慘ナル狀態ニ在リシニ拘ハラス、父ノ遺志ヲ繼ギテ其ノ政策ヲ實行セントシタルモ、適マ西班牙ニ於ケル王位繼承戰爭ハ、彼ヲシテ遠征事業ニ没頭セシメ、若クハ亞弗利加ニ於ケル屬領ノ保護ニ全力ヲ傾注セシムルコトヲ許サザル事情アリシヲ以テ、一七一三年彼レノ死スルヤ、ぶらんでんぶるぐノ植民地ハ永久回復スベカラザル狀態ニ陷レリ。

即チふりーどりつひ、あるへるむ一世ノ王位ヲ繼ギタル時ハ、内憂ノ爲メニ外領ヲ顧ミルノ閑ナク、從テせんと、とます島ニ於ケル事業ハ何等ノ賠償ヲ受クルコトナクシテ丁抹人ノ手ニ歸シ、又あるぐのん及ぐるーす、ふりーどりつひ

すぶるぐノ植民の經營ハ、一七一七年十二月十八日ノ條約ニ據リ僅カニ七千二百だかつと(八萬〇五百法)ノ價格ヲ以テ、西印度ニ於ケル和蘭會社ニ賣却セラレ、此ノ如クシテ主權者ノ意志ニ因リテ實現セラレタル獨逸ノ植民事業ノ最初ノ計畫ハ、遂ニ其ノ終リヲ至フスルコト能ハズシテ、不名譽ナル終末ヲ告グルニ至レリ。

爾來殆ンド一世紀半ノ間ハ、獨逸ハ植民の生活動ニ關シテハ全ク沒交渉ノ地位ニ立チシガ、第十九世紀ノ後半ニ至リ、捲土重來ノ勢ヲ以テ過去ニ於ケルヨリモ一層大規模ニ、又一層複雑セル海外發展運動ヲ開始スルニ至レリ、蓋シ獨逸ハ今ヤ多年ノ懸案タリシ國家的ノ統一事業ヲ完成スルコトヲ得タルヨリ、從來各聯邦間ニ小分セラレ互ニ無益ナル政争ノ爲メニ徒消シツツアリシ勢力ヲ集中シテ、世界的政策ニ轉用スルノ時期ニ達シタルヲ以テナリ。

* Köbner (S. 50.) ニ據レバ 1721年 トアリ